

保護者との連携

学校と保護者の連携がうまくいかず、問題が複雑化するケースが少なくありません。そこで、学校と保護者がよりよい関係を築き、子どもの問題状況を円滑に解決をしていくために必要な四つの視点をご紹介します。



視点1 何かそうせざるを得ない事情がある

- (1) 常識的、一般的「家族観」にとらわれすぎない。
- (2) 「こうすることは、保護者として当たり前だろう」
↓
「何か事情があるのだろうか」「何かサポートできることはないだろうか」
「わかっているはずだ」という思い込みでなく、相手の側に立って対応する。

視点2 保護者は子どもの一番よい点を知っている

- (1) 「学校ではわからなかったお子さんの一面を教えていただき助かりました」
↓↑
「家庭ではわからなかった子どもの一面を教えていただき助かりました」
- (2) 学校で見られるのは、その子の一部だけである。
- (3) 家族から教えてもらうというスタンスで子どもの姿や家族の思いを聴いていくと、子どもの全体像が見えてくる。
- (4) 「うちの子はそんなことをする子ではない」という保護者のとらえ方も、子どもの一側面である。

視点3 家族の思い(しんどさ、悲しさ)を感じる

- (1) 保護者は、家庭生活に関することを直接指導されると批判されているような気分になり拒否的、防衛的になりやすい。
【例】「朝はきちんと起こしてください」→「朝起こすこともできないのか」
- (2) 保護者は子どもを「愛している気持ち」「大切にしている気持ち」自体を否定されたと感じ止めたとき、たとえ自分のやり方が不適切だと思っても教師を拒絶することがある。
- (3) 指導ではなく、家族の思いを感じるようにすると、親は安心感からゆとりが生まれ、「もう少し頑張ってみるか」という気持ちになりやすい。

視点4 できる範囲で子育てに協力していく

- (1) 「なんとか学校に登校させてください」という言い方は、保護者として有効な手を打てないことを責められていると受け取られやすい。
- (2) 家族の子育てに対して、教師がお手伝いするという姿勢で連携すると、保護者は学校に助けられていると受け止めやすい。
- (3) 保護者は自分が学校の要求に応えていないと思うと、罪悪感や申し訳なさを感じ、教師と距離を置き、防衛的になりやすい。
- (4) 学校がすべき指導を押しつけない。